

## 『花びら供養』

2017年11月07日

石牟礼道子氏の『苦海浄土』を読んだ時の衝撃は忘れることはない。読むように勧めてくれた人は盲人の鍼灸医の夫を助けて働いておられた。本人はカリエスで、背骨が曲がっていて、病弱であった。懐妊した時、数件の産婦人科を訪ねたが皆、出産は無理だから堕ろしなさいと言われた。しかし、彼女は命をかけて出産した。息子は見事に成長し、特別支援学校の教師になった。彼女が『苦海浄土』を勧めてくださった。

水俣市のチッソ会社の工場廃液の有機水銀に侵され、苦しみ抜いて死んでいく人々の姿は地獄の様相であった。工場はもちろん、行政と御用学者も水銀禍を認めず、住民の苦悩は増し続けた。ようやく、因果関係が明らかになったが、多くの人が死に、後遺症に苦しむ人は数知れない。石牟礼氏は水俣の地獄の「苦海」を「浄土」と言った。この逆説に驚かされた。このことについて、下記のように語っている。「あのような極限状態になって死んでいかれた方が、見ておられたもう一つのこの世というか、あるいはあの世と言ったらいいのでしょうか。今度生まれ変わってくる時は、美しいところに生まれ変わりたいと思っておられましたので、非常に矛盾しますけれども、同義語、本当に苦界に落ちた人にしか、夢見ることができない世界を想定して、難しいですね、申し上げるの。」

今年の8月に、エッセイ集『花びら供養』を出版された。石牟礼氏の本を読むと「心が洗われる」という言葉が一番ぴったりする。人に対する限りない優しさ、生きとし生けるものへの敬意に満ちている。それは翻って、コンクリートで固められた町や河川、守銭奴になった人々、地球を滅ぼしかねない現代文明への厳しい批判になっている。

『花びら供養』から、多くのことを学んだが、動物に関するエッセイから紹介したい。石牟礼氏の父親は、12歳の時、庄屋に奉公に行き、使い走りとして2頭の馬の世話をした。朝は暗いうちから馬のために草刈りに行き、束ねて背負うと人間は見えず、草の束が動いているように見えたという。馬の毛並みがつやつやし、眸も人なつこくなった。「よっぽど煩悩かけて、養いよるばいなあ」と褒められた。彼は「わしはまだ十二、馬の方が位の高うござりやす」と答えた。石牟礼氏は、懸命に働く馬に対し、人間の世の中に悲憤を抱いていた父親が「いやしい精神を持たぬ馬」を畏敬していたことが少し分かると書いている。家では馬は飼えなかったが、犬や猫を可愛がった。

豚の仔が月足らずで生まれたような、肌はきれいなピンク色で、まだらに白い毛の生えた犬を預かった。毛の生え方は相変わらず、貧相で、気の毒というほかなかった。ある時弟さんが、愛らしく太った仔犬をもらってきて、「コロ」と名付けた。家族の関心は小さな「コロ」に集まり、可愛がった。4、5日して、毛の薄い「白」がいなくなった。家族で探す、後ろの防空壕で、うつろな目で伏せ、瀕死の状態で見つかった。卵粥を作って食べさせようとしたが、食べない。父親は地べたに両掌をついて、「チビに目が眩んで、お前は忘れとった。この通りじゃ。堪忍してくれい。お前どももあやまれ、このままじゃ死ぬぞ」と詫言った。子どもたちも父親の言葉を真似て、「白」の背中をなげたという。

夕食は、醤油漬けの一夜干しの鰯が主菜であった。猫が盲目の祖母のお膳から鰯をパクリと啜えた。父親は「お前が猫じゃからというて、差別したことがあるか。何ちゅう、卑しか根性の猫ぞ。めくら様とあなどって手を出したな」とドスの利いた声で怒鳴った。猫はその後、母猫の姿を見てか、仔猫たちも、めくら様の皿には手を出さなかったという。動物とも心を通わせ、畏敬する家族で育った石牟礼氏の原点を見るような思いがした。